「門脈狭窄に対する門脈ステント留置術：長期的な有効性とステント閉塞の危険因子に関する検討(多機関後ろ向き研究)」のお知らせ

門脈狭窄/閉塞は、悪性腫瘍や術後合併症により生じうる重篤な問題で、門脈圧亢進症や肝機能障害の原因となります。門脈ステント留置は、これらを改善させうる比較的安全で有効な治療ですが、ステントは閉塞してしまう事があります。しかし門脈ステント留置に関する多機関共同研究は行われておらず、平均的な長期成績が不明です。またステント留置後の狭窄残存・門脈大循環シャントの残存といったステント留置直後の血行動態は、ステント閉塞に関わる可能性がありますが、十分検討されていません。そこで本研究が計画され当院も参加しています。
ステント留置後の血行動態とステント閉塞との間に関連があるようであれば、治療時の注意・対応によって、ステント閉塞事例を減らす事ができる可能性があります。

＜研究対象＞当院で 2006 年 12 月 1 日から 2021 年 2 月 28 日の間に、門脈狭窄・閉塞に対するステントを留置した 20 歳以上の患者さん

＜研究期間＞2023 年 9 月 30 日までを予定しています。

＜研究内容＞
年齢、性別、病名、術式、症状、門脈狭窄の有無、程度、ステント留置時の情報、ステント閉塞の有無、技術的成功、臨床的成功、術後併用薬剤、合併症などを、ステント留置時の血管造影像・ステント留置前後の一連の CT 画像・診療録などから調べます。

＜主任研究者＞京都大学大学院医学研究科　放射線医学講座　教授　中本　裕士

研究で集めるデータには患者さんのお名前や住所など個人を特定する情報は含まれません。研究結果は，日本医学放射線学会や学会出版物として公表することがありますが、いかなる場合でも個人情報が漏れることはありません。本研究は当院の倫理・臨床研究審査委員会で承認されています。

本研究の趣旨をご理解いただき本研究に参加をお願いします。もし参加を望まれない場合は研究から除外しますので担当医師にお申し出ください。研究が始まった後でも自由に参加を取りやめることができますのでその際も担当医師にお伝えください。ご協力いただけない場合でも、今後の診療に不利益はきたしません。また、ご質問がある場合も担当医師にお伝えください。ご理解とご協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

2021 年 10 月 4 日

京都桂病院　放射線科診断部　部長　山岡　利成